

第37回

第5章 自然や他者とのかかわり

民主社会の成熟のために

今回学ぶこと

私たちの社会にあるさまざまな差別や偏見はどのように克服されてきたのか、具体的に学んだあと、差別や偏見が起こる心理について、また社会参加と奉仕について考えます。さらに正義について考えたロールズやそれを発展させたセン、また別の見方を発展させた、リバタリアニズムやコミュニタリアニズムについても学習します。



講師

千田有紀

■ 差別と偏見のない社会 ■

現在の日本社会には、被差別部落出身者への差別、アイヌ民族への差別、在日韓国・朝鮮人など在外外国人差別、あるいは障がい者に対する偏見や差別、さらには性差別など、さまざまな差別と偏見がまだあります。それに対して、こうした差別に反対する運動ももちろんあります。

例えば性差別に対しては、男女間にあるあらゆる形態の差別や不平等に反対し、撤廃を目指すフェミニズムの運動によって対抗されてきました。フェミニズムはたんなる権利の獲得運動ではなく、近代の社会が、いかにジェンダーによって変遷されてきたのかを問う実践でもありました。ここでは、具体的にフェミニズムの運動について学んでいきます。

また、サルトルは反ユダヤ主義を分析し、差別を行う人は、群衆の一人として行い、誰かを悪者に仕立て上げ、自分が優れていると自己満足に浸ったりする心理について考えました。

■ 社会参加と奉仕 ■

フランスの思想家サルトルは、「アンガージュマン」、社会参加の大切さを説きました。自分の頭で考えて、自分はどうしようと選んで、主体的に社会にコミットしていくことが重要であると言ったのです。

またマザー・テレサは、路上で苦しんで病人を^{みと}看取ったり、捨てられてた子を育てた

りして、貧しい人々に奉仕しました。

震災淡路大震災のときに多くの市民がボランティアとして駆けつけたことから、1995年が「ボランティア元年」と呼ばれています。ボランティアによって、人は与えるだけではなく、多くのことを得ることもできます。ボランティアとは何かについて考えたいと思います。

■ ■ 正義の考え方 ■ ■

功利主義の思想を批判して、「最大多数の最大幸福」を求めるのではなく、「正義」を考えた思想家にロールズがいます。「無知のヴェール」という制約のもとでは、みんなが平等に自由をもち、競争や参加の機会が均等に与えられ、分配は最も不遇な人の境遇を改善されるという、合理的な結論が出るだろうと主張しました。インドの経済学者センは、ケイパビリティ（潜在能力）という概念に着目し、形式的な平等ではなく、選択肢を選び出すことの重要性をときました。

こうした平等や公正を重視する考えかたに対して、個人の自由を極限まで尊重すべきだという考えかたに、リバタリアニズム、平等や公正を重んじ、自由な個人から考え始めることを批判した考えかたに、コミュニティ、共同体の価値観を重視する、コミュニタリアニズムという考えかたもあることを学びます。